

今年の管内の1月は比較的穏やかに経過したのではないかと思います。もしかしたら多少の荒天でも驚かなくなってきたのかもしれませんが。

▼突然ですが海のエコラベルというのをご存じでしょうか。エコラベルは、その製品が環境に配慮したものであることを示すもので、消費者が表示されている情報を目安として商品を購入することで結果的に環境負荷の削減につながるというものです。海のエコラベルは海洋環境や生態系、資源の維持に配慮した漁業に与えられ、認証を受けた漁業によって漁獲された水産物にラベルが貼られます。欧米のスーパーやレストランなどで浸透してきており、環境意識が高いとされる消費者の支持を集めているようです。日本でもイオンや生協などで取り扱いが始まっています。認証を受けた水産物は差別化されブランドとして付加価値も高まります。近年のように水揚げ量が減少している状況では、少しでも価値を高めたいところで、加工技術を利用したものとは違った付加価値の向上となります。海のエコラベルには現在世界で多くの認証数を占めるMSC(本部:ロンドン)という国際的認証機関がありますが、これまでに日本でこの認証を取得したのは京都府機船連のアカガレイと北海道漁連によるホタテガイだけです。また養殖版の国際認証ASC(本部:オランダ)を取得したのは宮城県漁協志津川支所のカキだけです。前々回のロンドンオリンピックから選手村や会場内のレストランで海のエコラベル製品が使われています。オリンピックが環境に配慮し、持続的な開催を目指しているからです。東京オリンピックでは国産の魚を味わっていただきたいですし、今後の更なる水産物の輸出促進にもつながる国際標準の認証は得ておきたいところです。ただ、国際的な認証を得るには海外から審査員を呼ぶなどの費用を含め数百万円、期間が少なくとも1年以上はかかるようで、東京オリンピックには間に合わないだろうとも言われています。国内にもマリン・エコラベル(MEL)ジャパンという認証機関があり、これまで24漁業が承認を受けていますが、世界的なアピール度に欠けるという課題があるようです。ISO(国際標準化機構)では環境ラベルを3種類に分類していて、タイプⅠには事業者の申請に応じて第三者機関が認証する上記MSCやMELなどがあります。タイプⅡはISO14021の要求事項に合わせて各事業者が自己基準を設定し、その基準に適合しているかどうかを事業者自信が認証をするもので、宣伝や広告にもなるものです。タイプⅢは製品の定量的な環境負荷データを開示し、合否の判定は行わず評価を読み手に委ねられる点が特徴です。ラベルの付加価値としての効果がどれほど期待できるか、また作業がどれほど伴うのか分かりませんがタイプⅡ・Ⅲを利用し、例えば道内の各漁協が環境や資源に配慮した漁業の自己基準を設定したり、環境負荷データをホームページなどに公開し、その基準に適合した漁業で漁獲した魚にラベルを張って宣伝するなどの方法はどうか。(網走水試 上田)